

書 評

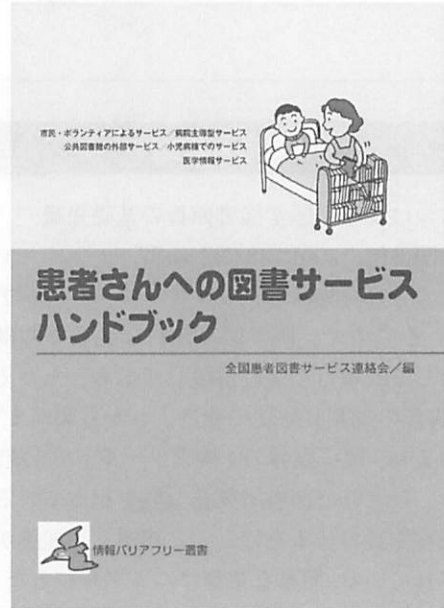
「患者さんへの図書サービス ハンドブック」 (情報バリアフリー叢書)

全国患者図書サービス連絡会編

東京 大活字

2001年4月30日発行

B5版 317p 定価3,500円



病院図書館に勤務し始めると、膨大で多彩な医学情報の前では医療従事者への医学情報の提供だけが唯一の責務と考え、図書館サービスの理想はすっかり忘れてしまいます。私などは、それが病に苦しむ人を救う一端を担っているのだとさえ思って変に得心しています。ところが、これに甘んぜず、果敢に患者サービスに身を挺する方々が全国には沢山おられます。そんな方々がこれから患者サービスを始めようとする人々に、優しい手引を与え、その参考にとこれまでの多くの貴重な経験を集めて示したのが本書です。

さて、そのサービスの形態は次の章構成でもおわかりのように多様です。1. 市民・ボランティアによるサービス、2. 病院主導型サービス、3. 公共図書館の外部サービス、4. 小児科棟でのサービス、5. 医学情報サービス、資料編。関心と意欲を持った人がこれから患者サービスを始めようとする際、自分のおかれた環境と条件下で、どれかひとつあるいは折衷の形かを参考にすることができま。このように、本書は、実践者による患者サービスのきめ細かな指南書であるだけでなく、これまでに発表された事例報告記のアルヒーフであることも大きな特徴となっていて、物語としての面白みさえあります。

私が個人的に特に興味を持ったのは、デリケートな問題を含み周到な対応が求められる「医学情報サービス」の部分でした。患者サービスにおけるプライバシーの保護、守秘義務などが幾つか述べてある中で、次の戒めは特に印象的です。それは面談の場面で「患者の病気に同情を示してはならない。」との言葉です。これは長年の実践に裏付けされた山室さんの言葉ですが、実践した人にしか言えない言葉であり、患者サービスにおける厳しさと優しさを象徴する戒めだと思いました。

細かな点ですが、気になったことは「患者さん」と表記してある箇所と、「患者」と表記してある箇所が混在していたことでした。「事例編」では初出に従うにしても、多分、編集にあたった方々も本編での統一には迷われたことと思います。結局、各執筆者の意向を尊重されたのでしょう。それはともかく、装丁は気品があって親しみやすく、活字も美しく読み易く、内容は日本の図書館サービスの質的深まりを展開した一冊だと思いました。

(国立京都病院 図書室 小田中 徹也)